天台学系による涅槃経研究

鈴木祐孝

涅槃経研究の流れを天台系に注目する時、灌頂の『涅槃経疏』、それを受けての道暹、行満両師の『涅槃経疏私記』が存することは周知の通りである。これから論じようとすることは両師の『涅槃経私記』に関わる二つの問題のごく限定される点である。

第一点は灌頂撰、湛然再治の疏にみられる『私謂』という説示を両師の私記はどの様に扱い、問題としているのかという点。

第二点は道暹の『私記』においてのみ『澤州』なる引用がみられることである。そこで『澤州』とは誰を名指し、その引用が涅槃経研究にどの様な影響を及ぼしたのかという点。

以上の二点について少しく論じてみたい。

先の第一点に関わる問題であるが、天台系による涅槃経研究はその原流を、南北朝梁代に『涅槃宗』という一宗によってその最高点に達する、という指摘があるがその後の涅槃経研究は天台系によってなされていくのである。その代表的著作が、灌頂の疏であり、その再治をなしたのが湛然であり、その門下によって実によく研究がなされているのである。

そこで再治に関わる問題であるが、いわゆる再治された個所は約五十個所に及び、その再治された書き出しが『私謂』である。その説示のなかで特に問題となるのが仏性義であろう。それは灌頂と湛然において少し解釈が異るという点である。それは湛然が天台学において涅槃経解釈をする時に、当時の華厳学つまり、法蔵、澄観の説などの影響があったということなどは先学の示す所であり、見のがせない点であろう。しからばその点について両師の『私記』などはどの様に受けとめたのであろうか。つまり天台系による涅槃経研究の流れを灌頂、湛然、そして湛然門下としての立場にたつ行満、そして道暹、元皓等が存するわけであるが、さらに時代が下がって智円の『涅槃経疏三徳指帰』が代表的である。それらの関係を通じて先に示した道暹の『私記』にでてくる所の『澤州』なる引用をみてみたいと思う。最初に「澤州」と

は誰を名指すのかと云えば、それは浄影寺慧遠なのである。その典拠、唐高僧伝おいて「澤州本寺」とか「よく涅槃経を祖翌す」ともあり、澤州とは地名であり、そこに住んでいた人そのものが涅槃経研究を行っていたと見るべきであろう。さらにそのことを明確にしているのは、智証大師請来録にも「澤州、大涅槃経義記」とあり、澤州とは慧遠であることがわかる。次にその引用文であるが慧遠の『義記』をそのまま引用しているのである。その引用は約五十点にも及んでいるのであり、特に仏性義という内容に限定してみると、さらに次の二点になると思われる。

第一点は、慧遠の説いた涅槃経そのものの位置づけは各経典の中心となる経典でないということ。これに対して道暹は、機根にかなった必要性において説かれた経典であると位置づけること。この位置づけを明確にする為に『義記』を引用し批判したのであろうという点。

第二点は、先の批判であるが華厳学に影響を与えたところの地論派までさかのぼっているという点。その背景には、当時湛然の教学と、他宗、他の学説との関係が存することである。このことは先に示した如く仏性義の問題になると思われる。このことに関して智円の『三徳指帰』では、灌頂と湛然の解釈には優劣なしと。これは金剛錍顕性録に明かすが如しとなっているのであるが、この点は今回は留保し、義記の引用をみてみる次第である。

偈判有二。初問学法。云何得近無上道下問学行。此云何知如下大衆問品未将答学行。迦葉請云願説是大涅槃中所得功徳。故知。前是学法後是学行。法通理事行唯在事。法通内外行徳唯内。法通三性観三性法皆得起行。行唯在善。法通自他。他人之行徳為己法。己家之行徳為他法。如此判者太為浅局。

これは、議記の釈が道暹からしてみれば、残い判断であると示しているのであるが、何故にという理由を明示していないのである。そこでこの部分を灌頂の「疏」にかえってみると次の様にでてくるのである。

於問中分二十三偈為両前十九偈正作三十四問後四偈講答初一行問仏因果仏修因得果不可言現未強可指於過去。

と示すのである。これは長寿品の云何得長寿以下の問を三つに分け「云何比経」より過現未の三世の現在、つまり機根の機において説き、又云何得広大より先に示した（義記の引用の初め）云何而得近最勝無上道までを過去、現在に置きかえて示したから、今は未来を示すというのである。このことをさらに智円の「三徳指帰」でみてみよう。

問佛因果者即問佛久遠本因本果也。以此経在法華顕之後。中略―当機而説者為常機談常教究竟到於三徳彼岸也。

この説示において灌頂の疏を引いて「機」にあたって常教、いわゆる法身、般若、解脱の三徳が常住する教と説か

れ、又涅槃経というものは法華経の説かれた後に説かれた経典であるという註釈から言えることは、道暹が義記を引用した偈の判じ方は天台学の法華経で救われなかった人々を救う追説追泯の教えという立場の涅槃経の位置づけとその根本思想である所の法身常住という点の説き方が甚だ浅いと批判したものと思われる。

これは結局慧遠の教判で位置づける涅槃経観と、灌頂、湛然、道暹、そして時代が下がっての智円が位置づける涅槃経観の差は、仏の所説からしてみれば皆同じとする慧遠の説と、その同じく説かれた仏の教えをどの様に受け取めたかという点を考えた場合に、その教えを聞く人々の態度を考えて仏の教えがあると規定する時、その教えにも法華経をふくめて諸経を説く必要性が根拠にかなったものであることにおいて、涅槃経を説いたのであるということを明確にする為に義記の引用が道暹にあったのではないかと思われる。

以上の考察から道暹が澤州云として引用した慧遠の『義記』は、結局涅槃経の位置づけで少しく異り批判したものと思われる。

つまり慧遠の位置づけは、経典は全て仏の所説であり、涅槃経を中心にみるのではないという点、これに対して道暹は、あくまでも機根にかなった諸経を説く必要があり、その諸経の一つである涅槃経も又必要（法華経で救われなかった者に対して説かれた）において説かれたものであることを明確にしようとして『義記』を引用して批判したものと思われるのである。

＜細註省略＞

＜註記＞

発表の後に駒大教授池田魯参先生と叡山学院の坂本広博先生に質問と貴重な御教示を頂いた。池田先生は、天台系と限定しないで、東洋大学の河村孝照博士がなされた厳密な検討を与えた結果導き出される様な方法ではどうか？　という様な研究の一方法論を明示して、小論の研究にもう少し広範なそれも今何が、何故という問題意識をもって考察されるべきだという御教示を頂いた。その点については、私も限定された点からの考察にとどまることなく、疏の読み方、読まれ方、さらに末註書をめぐっての問題点をもう少し具さに考察をし、先生が御指摘下さった点を課題としたい。

さらに叡山学院の坂本先生は、この発表と同じ内容、つまり道暹、行満の『私記』についての研究の先学であり、私も非常に多くの御指導と御教示を頂いており感謝申し上げる次第である。先生は、このことに関して最近の発表は、さらにどの様な方法で？という内容の質問を頂いたが、先にも述べた通り坂本先生の御発表よりずっと発表がなく、私も先生の御教示を基に限定された範囲内の問題解決しかできなかった点を課題とし、池田先生、坂本先生の御質問と御教示に切に謝意を表します。（駒大大学院修了）